
黒崎 一護の日常(仮)

香夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒崎 一護の日常（仮）

【Nコード】

N5605X

【作者名】

香夜

【あらすじ】

「一護の日常が見たい！！」「一護ってカッコイイよね！！」「一護は愛されてるに違いない！！（not恋愛）」という作者の願望を詰め込んだ完全自己満足な短編集。
超不定期更新です。

設定〱黒崎家〱（前書き）

連載終わってないのに始めちゃいました……？

しかし後悔はしていない！！

向こうは超シリアスな展開ですが、こちらはギャグ全開で行かせていただきます

ではまず設定からどうぞ

設定／黒崎家

黒崎 一護：

喧嘩は強い。しかし自分から売るとはほとんど無い。売る場合は何かしら理由がある。

優しい。特に女子供には優しい。それでたまに勘違いされることもある。

頭いい。ただし本人曰く「理解力は低いんだよ。だから時間かけて勉強しなきゃわかんねえ」らしい。しかし客観的に見て記憶力はそれなりにいいし応用も得意。それと集中力がハンパない。

それなりにモテル。ただし本人は自覚皆無。「こんな仏頂面がモテルわけねえだろ」らしい。実際は父親譲りの垂れ目以外は美人だった母親似。

父子家庭なのでそれなりに料理できる。腕前は普通。遊子に負ける。でも遊子と夏梨は兄の料理をかなり喜ぶ。お菓子作りが趣味でかなりの腕前。

結構キレイ好き。散らかつてるとイライラする。なので暇な時は自室以外も細かいところの掃除をする。

家族がとても大事。

黒崎 遊子：

家事をマルチにこなしちゃうスーパー小学生。

長女だけど甘えたがり（特に兄に対して）。

黒崎兄妹の中では一番亡き母親に似ている。可愛い。

男子にモテルが重度のブラコンなので周囲の男子には今のところ興味無し。

家族大好き。

黒崎 夏梨：

スポーツ万能なサッカー少女。

末っ子だけどクールなしっかり者（に見せ掛けてこちらも結構ブラコン）。

家事は不得意。

どちらかと言えば父親似。

黒崎 一心：

黒崎家の大黒柱。

超・お調子者。ふざけ過ぎて子供達から鉄拳制裁を喰らうこともある（もしくは『口撃』を喰らう）

基本はそんな感じだがたまに真面目になると『父親』らしく頼りがいのある面を見せる

設定〱黒崎家〱（後書き）

この段階で「あ、無理」と思われた方は記憶から削除して下さい
作者は公式設定とか原作とか丸無視で行く方向なんで

あ、でもネタや題名は大募集中ですんでそこよろしくお願いします
（＾人＾）

でわでわ、次回（また設定です）をお楽しみに〱（誰も待ってない
とか言わないで……？）

設定↪現世組↪（前書き）

続いて現世組の設定です。

設定／現世組／

有沢 たつき：

一護の幼なじみ。一護との関係は姉弟。家族。一護の家族も家族として接している。たつきの家族も黒崎家を家族として扱っている。両者の家族は「将来結婚しないかなー」とか思ってるけどお互いの間に恋愛感情は無い。でも仲良し。

お互い異性としての意識が薄い。下着までなら見られても全然動じない。裸を見ても『ちよつとびっくり』くらい（他の人にはちゃんと恥ずかしがる）。

織姫の恋を応援しているが、一護の鈍さに少し辟易している。

茶渡 康虎：

一護の中学からの親友。がたいの良さと口数の少なさで誤解され安いが、実は友達思いだったり可愛いもの好きだったりする。

織姫の片想いを応援している。

井上 織姫：

一護の友人。一護に片想いをしている。

巨乳美少女。かなりモテる。しかし一護しか目に入っていないのと元々天然なので気づかない。

意外に成績優秀。

たつきとルキアの一護との距離感にヤキモキすることも。

石田 雨竜：

一護のライバル。何かとそりが合わない。

頭のいい馬鹿。

成績優秀で顔立ちも整っている為それなりにモテるが、恋愛下手なので気後れしてしまう。

浅野 啓吾：

一護の友人。かなりのお調子者。一心と気が合う。
実際はそれなりにカッコイイのだが言動で三枚目扱いに。

小島 水色：

一護の友人。上辺は小悪魔、中身は腹黒。
可愛い顔立ちで年上女性にモテる。

啓吾とは中学からの付き合い。

設定〱現世組〱（後書き）

出てきてないキャラは今後足していく（かも知れない）予定です。

次は死神達の設定です。

設定／死神／

朽木 ルキア：

一護が初めて出会った死神。一護の良き友人。
かなりの甘党

背は低いがかなりの美少女。

恋次のアタックには全然気づいていない天然さん。

織姫の片恋を応援しているが、たまに一護にドキドキしている。が、恋愛感情を抜きにした単なる照れや恥ずかしさ故だと思っている。

一護はルキアを全く意識していない。

阿ばら井 恋次：

一護の良きライバル。よく手合わせをする。

ルキアが好き。だが全く気づいてもらえてない。一護がルキアを恋愛対象として見ていないと分かっていても、よく一緒に行動しているのでヤキモキしている。たまに爆発する。
かなりの甘党。

朽木 白哉：

ルキアの義兄で恋次の上司。

クールな天然。

一護のことは口では色々言うが認めている。

恋次のルキアに対するアタックを悉く邪魔をしている（実力や人柄は認めているがルキアを取られるのが嫌）。

日番谷 冬獅朗：

クールな天才児。苦勞性。

何度言っても名前呼びや子供扱いを止めない一護に苛立ってはいるが実力と人格は認めている。

松本 乱菊：

冬獅朗の部下。

ナイスバディな大人な女性。自分の容姿を自覚しており、男性陣を翻弄する。

一護を「初で可愛い子」と思い、よくからかう。

斑目 一角：

戦闘狂。一護との手合わせが最近のマイブーム。
ハゲ（剃っている）。

綾瀬川 弓親：

ナルシスト。独自の美意識と美学を持っている。
おかっぱ。

設定〱死神〱（後書き）

説明の短いキャラは……すみませんよく掴めてないキャラなんです？

次回からはお話を書きます！

駄文ですが頑張らせていただきます！！

お出かけ〜兄妹編?〜(前書き)

始まりました

お出かけ〜兄妹編？〜

「なあ冬獅朗……一日だけでいいから、完全に死神業、休むことって無理か？」

「……………あ？」

ある日の昼下がりの一護の部屋での虚討伐報告中。

一護の真剣な表情での頼みに、しかし日番谷はいきなりさと話の突飛さに驚くのみだった。

なぜ一護はこんなことを言い出したのか？
話は昨日の夜に遡る——…

『たまには一緒に遊びに行きたいのー！』
『……………いきなりどうした？』

風呂から上がり、髪を乾かしていた一護にいきなりそう言ってきたのは遊子だった

遊子はぷうっと頬を膨らませ、

『お兄ちゃん、高校に入ってからそうだけど…………最近特にあたし達と一緒に居てくれないんだもん……………』
『うつ……………』

言うまでもなく、代行業が忙しいからである。

一護とて、可愛い妹のおねだりくらい聞いてやりたいが……

（休みたいつつつて、簡単に休めるモンでもねえしな……）

そこが問題であった。

もし出かけた先で虚に出てこられたら、妹と遊ぶなどできなくなる。そうなるとこの妹は絶対に一週間は拗ねてしまう。それだけは避けたい。

ならば最初から約束しなければいい。

ここは心を鬼にして……

『あのな、遊子……』

『遊子ー、一兄の返事どうだっ……あ、まだ？』

……断ろうとした一護の言葉を遮ったのは、もう一人の妹の夏梨だった。

『夏梨……お前も俺と出掛けたいのか？』

一護は少し驚いた。夏梨はどちらかと言うと遊子より冷めていて、あまり甘えてくることはないのだが……

その夏梨が、

『あ、あたしだって、たまには一兄と一緒に遊びたい……』

と顔を赤くしながら言うものだから、

「なあ冬獅朗……一日だけでいいから、完全に死神業、休むことって無理かな？」

「.....あ？」

と、日番谷に頼むこととなったのであった.....

お出かけ〜兄妹編〜（後書き）

まずは兄妹の楽しいお出かけから！！
と言ってもまだ全然進んでませんが？

気長にお待ち下さいませ。

誤字脱字があればご連絡下さい。

？

「出来る訳ねえだろ」

事情を話し、もう一度頼んでみた際の日番谷隊長様の御返事はこうだった。

「金貰ってんだ、半端な仕事すんじゃねえよ」
「ですよね〜……」

一護はがつくりとうなだれた

ちなみに金とは御邸から出ている。山本総隊長の計らいに因るものだ。

『人間とは言え、我々と同じ仕事をしておるのなら給金をやらねばなるまい』

と言って、現世派遣組の誰か（主にルキア）が魂街に戻る度に倒した虚の数や強さに合わせた給金を支払っているのだ。
その為、実は今一護は結構な小金持ちだった。

「やっぱダメかあ〜……」

「あきらめろ」

「あきらめることないわよ、一護！ー！」

「ー！ー！ー！ー！」

いきなり

二人しかいなかった筈の空間に現れたのは、乱菊だった。

「ら、乱菊さん……？ 一体何処から………？」

「松本、今の言葉はどういう意味だ？」

突然の乱菊の登場に、一護はただうろたえるだけだが、日番谷は冷静に問い質した。

「『一護は人間としての生活もあるんだから休ませてあげるべきです』って総隊長に打診しといたのよ？」

「え……」

「総隊長も同意してくれたわ」

「……っ乱菊さんん！！」

思わぬ援軍に顔を綻ばせる一護は、普段の仏頂面よりも幼く——と
いうか歳相応に見える。

「楽しんでらっしゃい」

「はい、ありがとうございますっ」

にこやかに言う乱菊と珍しく笑う一護。

そんな光景を前にして日番谷が思うのは、

（松本がこんな親切に……絶対何かあるな）

だった。

しかし一護に教えない。

乱菊がなんらかの計画を立てているのならば、それを邪魔すれば間違いないと怨まれるからだ。

なので

（まあ、がんばれ）

と、胸の内で一護に無責任なエールを送るのみに留めたのだった。

？

「お兄ちゃん、早く早く!!」

「一兄、遅い!」

「んなに急ぐなよ……まだ10時半だぞ?」

ある晴れた日曜。

黒崎兄妹は、連れだって駅近くのショッピングモールに来ていた。

休みを貰った一護は、直ぐに妹達に休日付き合つと告げた。

「ホントに?!」

「ヤッター!!」

「どっか行きたいところとか、したいこととかあるか? なんでも付き合つぞ?」

妹達も喜んだが、一護も久しぶりに兄妹で過ごせる休日に知らず知らず顔が綻んだ。

こんなに喜んでくれるのなら、なんでもしてやりたいなあ金ならあるんだし、と考える程度には、一護は妹に甘かった。

二人は一護のその言葉を聞くと、

「「買い物に行きたい」」

と声を揃えて言った。

そんな訳で兄妹はここにやって来たのだった。

三人は通路を並んで歩く。

……因みに父は仕事だ。

「三人で買い物に行く」と言った昨晚はかなりうつとうしかったのは、言うまでもない。

「あ！」

遊子がいきなり声を上げた。

一護と夏梨が彼女の視線の先に目をやると、その先には可愛らしいいかにも『女の子』な感じの店があった。

遊子がこちらをキラキラとした目で見てくる。

二人は顔を見合わせ苦笑した。

？

「ウーン……どっちがいいかなあ……」

「あんた、またそんなのを……」

遊子が手に持っているのは、いわゆる『ブサカワイイ』感じのぬいぐるみ。

女の子の子したものや、女子特有の何にでも「カワイー」と言う感性を苦手とする夏梨にしてみれば、何をそんなに悩むのかわからなかった。

「ええ〜可愛いよー」

「あたしにやわかんないよ……」

「お兄ちゃんはわかってくれるよね？」

「……わりい、わかんねえわ」

「ええ〜！」

ぷうつと膨れてみせる遊子は顔は、しかし楽しそうだ。

こうしたちよつとした会話すら朝晩の食事時にしか……しかも疲れていた所以需要最低限しか交わしていなかった。

（……これからはもう少し構おう）

と一護が決意している間に、

「よおし、決めた！ この子にする！！」

と、遊子がぬいぐるみを一つ持って会計所に行くこととする。

(……あれ?)

「遊子、それだけでいいのか?」

一護はここに入る前に「今日はいーっぱい買い物するんだー?」という宣言を聞いている。

なのになにぐるみ一つ買って終わりとは……

「だって……この後もしんごでお昼食べたり色々遊んだりしたいんだもん……」

「……」

「そんなに高いのか」と値札を見てみれば、なるほど確かに小学生の財布にはなかなか痛い出費になるだろう値段だった。

――と。

一護はふと、あることを思い出した。

確か、遊子は店に入って直ぐに――

「お兄ちゃん?」

「一兄?」

「うえっ?!」

いきなり。

思考の中に埋まっていた一護に、妹達が声を掛けてきた。

……いや、いきなりではない。

どうやら会計が終わったらしい。

「あたしコーユ店、苦手なんだよねえ……早く出よ?」

「夏梨ちゃんひどい!! いいお店なのに」

「……あー、わりい。ちょっとトイレ借りるから先出ててくれ」

そう言つて妹達に背を向ける。

一旦本当にトイレに行き、しばらくしてから店内に妹達の姿がないのを確認してから、店内を物色する。

幸いさほど時間を掛けずに目当てのものを見つけ、それを手に取り会計所へ向かう。

これを渡す時に妹が浮かべるであろう笑顔を思い浮かべ、頬が緩むのを自覚しながら――

？

ブーツがタイルを上機嫌に蹴る音がする。

音の発信源は、ぬいぐるみの入った袋を持つ遊子だ。

時折ショーウィンドーに写る自分の首元に視線を向け、ひどく満足そうに笑う自身の姉に、夏梨はため息を吐いた。

……と言っても、別に彼女に悪感情を抱いている訳ではない。

ただ単に周りの大人達からの微笑ましそうな視線が恥ずかしいからだ。

嬉しいのはわかるが、少し自重してほしい。

……あの店を出た後。

一護から遊子に渡されたのは、プレゼント用にキレイにラッピングされた箱に入ったネックレスだった。

『お前さ、店に入って直ぐにこれらの棚見てただろ？ 値段見て諦めてたみたいだけど……』

一護は周りから鈍い鈍いと言われるが、妹達のこととは結構良く見ている。

おまけにセンスがいい。

花をモチーフにデザインされているそれは、シンプルだが可愛らしい。

いかにも遊子が好きそうだし、良く似合っている。

「……………」

——実は少しだけ、姉が羨ましかった。

別にネックレスが欲しかった訳ではない。

そういうものは苦手だ。

ただ——兄が買ってくれるということに意味がある。

——と。

「なあ、二人とも」

あの店寄っていいか？

そう言って兄が指で示したのは、大人用から子供用まで幅広く扱っているメンズショップだった。

（これとか、カッコイイな〜）

一護は「買いたいものがある」と言っただけでどこかに行ったし、遊子は遊子で普段あまり縁のない店が珍しいのか散策中。

つまり、今は夏梨一人である。

夏梨は普段あまり好んで人とつるもうとしない。

しないが……

「『今日一日は一緒にいて』って言ったのに……」

……軽く拗ねていた。

遊子のようにあからさまではないにしても、彼女も結構なブラコンだった。

と、そこへ。

いきなり頭の上に手を置かれた。

一瞬びくり、とするも、直ぐに気配というか雰囲気では誰か分かり、緊張を解く。

そのまま何故か頭を撫でられる。

「……何？ 一兄」

「んー……」

尋ねると、曖昧な返事。

どうやら言おうか言うつまいか迷っているらしい。

言葉を濁される方が気持ち悪いので言わせようと口を開き――

「いや……なんか、えらく可愛い独り言が聞こえたもんで……」

そのままの形で硬直する。

次いでジワジワと赤くなる頬を自覚し、内心羞恥に悶えていた。

（なっんで声に出したしあたし……！！）

兄の顔は見なくても分かる。

嬉しそうに顔を綻ばせ、少し頬を赤らめているのだろう。

自分の一言がその表情を引き出したのだ、普段ならば表に出さなくとも内心で喜ぶが……

（これじゃ自爆じゃん……！！）

今は無理だ、絶対に。

「そ、そういえばさっ、一兄何買ったの?! その袋に入ってるの?」

何とかして話をそらそうと、夏梨は一護が持つ袋に目をやる。

「ああ、いいのがあったぜ」

「よかったね」

嬉しそうな兄の声音に、自分まで嬉しくなってくる。

……まだ顔は上げられないままだが。

見せようとしてくれているのか、ガサガサ音がして――

ぽふっ

「……へ?」

そんな音を立てて、頭に何か置かれた。思わず、間抜けな声が出してしまった。

「おー似合う似合う。んでもって……」

今度はぐいっと――でも痛くない程度に腕を掴まれ、何かを付けられた

「おっし、鏡見てみる」

満足そうな兄に言われ、全身が写る大きな鏡の前に立った。そこには――

夏梨好きなデザインの帽子とリストバンドを付けた夏梨が写ってい

た。

「…………え？」

再度間抜けな声が出た。

「え…………？ 一兄、自分の買い物は？」

「ん？ それ買うのがこの店入った目的だぞ？」

（……………。

もしかして……………ばれてた？ 羨ましいと思ったの……………）

……………。

うつわあああああっ！！

夏梨は先程とは比べものにならない羞恥に見舞われていた。

そして同時に——嬉しかった

兄がちゃんと自分も見ていることが。

（なっんで普段鈍いくせにこういうことは……………っ！！ しかもバツ
チリあたし好みだし！！）

しかしあまり素直ではない彼女は、

「あ、あたし別に欲しいなんて言っただけだし！！」

と言ってしまうのだった——

？

「……………」

（あたしのバカアアア！　なんであそこでああも可愛くない台詞が出ちゃう訳？！　あああもうバカアアア！！！！）

黒崎　夏梨、現在絶賛混乱中。

（ちょっとは遊子みたいに可愛く「ありがとう？」とか言えないの？！　あああああホントにもうバカバカバ……）

「別にいいだろ？」

「……え？」

本日三度目の間抜けな声が出てしまった。

「俺がお前に買ったただけだし」

「……………！！」

ああもう。

全部分かれちゃってる。

羨ましかったのも。

拗ねてたのも。

照れて可愛くないこと言っちゃったのも。

それが恥ずかしくて——すごく嬉しい。

「貰ったげるよ……あたしにとって買ったんなら、あたしが受け取ら

ないと捨てちゃうんでしょ？ もったいないから、使ったげる」

「……ありがとな」

ようやく顔を上げると、そこには予想通り嬉しそうな兄の顔があった。

それを見ると、自分がさっきまで感じていた小さな不満や多大な羞恥心はどうでもよくなってしまった。

「行こう。遊子探さなきゃ」

この後見つけた遊子に「夏梨ちゃんだけ二つ買ってもらうなんてズルイ……」と言われ、「値段的には釣り合うんだ」と一護が反論するも駄々をこねられ、アイスを買うハメになったのは……また、別のお話――

？

「へえー……」

「ふーん……」

「……そんなに珍しいか？」

「うん」

アイスを買った後に一護が妹達を連れて来たのは……ゲームセンタ―だった。

きゅんぴゅん、という甲高い電子音がそこかしこから聞こえる。室内はほんのり暖かい。

それなのに大きなところで、一護はたつきや啓吾等と何度も来たことがあった。

しかし、二人は違った。

遊子は普段から家事で忙しいし、友達も女の子が主でおしゃべり等をよくしている。

夏梨は逆に男友達の方が多いが、屋外で遊ぶことを好むため、こういう場所にはあまり来たことがない。

二人とも、興味深そうに周囲を見回していた。

――と、

「あー！」

遊子が短く声を上げ、一つの筐体に小走りで近づいた。その先には――クレイゲーム。

(……げ)

一護がホンの少しだけ頬を引き攣らせたのを、遊子も夏梨も気付かなかった。

？

「……ぐ、」

「お兄ちゃん……」

「……く、ぐう……」

「………一兄って、」

クレーンゲーム、下手だったんだねえ

夏梨のしみじみとした一言は、騒がしい筈の店内で不思議と良く響いた気がした。

一護はクレーンゲームが苦手だ。ゲーム全般においては『とても強い』とは言えないが、一概に『弱い』とも言えないのだが……

「ぐううう……」

「……下手くそ」

ぬいぐるみを掴んだクレーンが空中で解け、落下する。

………通算十二回目だった。

500円で三回出来るのだが、これで2000円使った計算になる。

「………わりい遊子……」

「ううん、いいよ別に！」

それより、他のゲームしよ？ と誘ってくる遊子に、一護は落ち込みつつも「おう」と応えていた。
兄には散々言ったが、夏梨もあまりこういったゲームは得意ではないので、諦めるしかない。

——と、

「あつれえー?! 一護じゃん!!」

その女の子達って……確か妹ちゃん達だったわけ??

うるさいですよ浅野さん。

敬語いやー!

一護の良く知る声が、店内を更に賑やかにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5605x/>

黒崎 一護の日常(仮)

2011年11月8日13時16分発行